身延山

利生記　甲州鰍沢復讐　参

身延山

利生記　甲州鰍沢報讐　下編

第五　探題　送別　田家月　寄舟恋

人のあくまでも情けふかきほどは、妬みとおもふも、それに倍するものなれば、悦次郎は是までのお露が実情をおもいやり、よもかかることのあるべきとはしらざりしに、飯岡の後室より、微細の証状を申しこせし上なれば、実に心の変わりしやらんと思うより、しきりに疑念をさしはさみやがて使いをして、捨次郎を此方へ引き取るべきよし、規度いひ含め遣はしけるにぞ、お露此の使いをえて、

あなうらめしやみづからこそさぞ憎しとおぼされんが、此の子には何事のありて、母が手を引き放し、憂き目を見せんとし給ふぞや、伯父君の頑なといい、おみす御寮もなさぬ仲、何いとしとおもひたまふべき、いまだ東西もわかぬ子の片時母が懐をはなれて、よも生くべきとはおもひもよらず、去るにてもいかなればおもはぬ人と浮き名をたて、おもふ人に疎まれ果て、そのかなしみはいかばかりなるに、今又稚きものに引きわかれ、何とながらへいらるべき、死ぬる命は厭はねども、身におぼへなき悪名もすすがずして、遂にはそれになり得んことの悔しければ、たとへ何地のならはぬすまい、野の末山の奥までも、捨次郎を懐に守り育ていつかはこの身のくもりなきを、しらせまいらせたき願ひなれば、只このままに、よきにとばかりいひさして、涙片手に捨次郎を抱き〆てはなさざりければ、使いの男あららかにいふよう、たとへいかように御申しありとても、引きはなし連れ帰るべしと、くれぐれの仰せなればちからなし、はやく此方へ御わたしあれと、にがり切りてぞ申しける、お露声をあげて悲しみ

とうして任せざりければ、使いのものいらちて、理不尽にひきわけんとするに、捨次郎母にとりつき泣き叫ぶを、ようようにとりはなせば、手をあげてしたひひくありさま、いたわしとはおもいながら、心弱くて叶はじと、かの使はそのままいだきて立出ければ、お露そこに臥し転び、生体もなく嘆きけるが、次第に子のなくこえも遠く聞こえずなりければ、おもひ切りて覚悟の体に起き上がりたる所に、後家お里うたち出で、椎柴野より指図にしたがひ、労はしながら御身の母御妙信尼、今、笹川の庵室にありとの事、それ迄送りまいらすべきよし、とくとく用意なし給へと、聞きもあへずお露いとど涙にくれ、しばらくして申しけるは、是迄だんだんの御いとおしみ、むくひはべらんようもなし、去るほどに、かくあじきなき身のやがて世になきものときこしめさば捨次郎を我が記念と御情けをかけたび給へ、けふを限りに此のかたを出されまいらせん事は、露ばかりもいたみわきまへはべらねども此ほどなれし人々に、名残惜しくこころひかれはべるなりと、ふし沈めば、心なき側女（こしもと）、ひ（はした）共迄も袂をぬらすぞ理なれ。はてしもあらねば、お露もなくなく

籠に乗り移り、とてもなき身と心中に、南無妙法の七文字をとなへつつ、折もあらば何地の河にも身を沈め、底の水屑とならんものをと、おもひこんでゆく所に、付き添ひ来たりしものども、虚事あらせじと心をくばりて、道を急ぎ、行程八里をその日の黄昏に、笹川へと着きたりける。去れやここにさいつ頃、房州市が坂にて、遁世したるお露が母妙信尼は、三とせ以前より此の里に草庵をしつらひ、高祖日蓮大士の木像を安置し、朝夕の勤行怠らず、後世安心を専らにして暮らしけるが、娘お露の椎柴野にありつるほどは、折々の便も疎からず、行く末たのもしくおもひいたりしも、夢かとばかり、けふはからずも、ここに来たりし娘の容貌は、髪もいつとりあげたるままにや、顔おもげに、まぶたはれて、さながら物思ふ人のありさまなれば、妙信心ならず、しょう行（いざない）来たりしものどもに子細を問うに、何事もわれわれは存ぜず、直に御尋ねあるべしと、すげなくも言いはなち、駕さし荷なひ出で行きける、お露今はつつむに詮なく、始終をつぶさにかたりて、とても罪障ふかき身の世にあらんほどは、かく

ものおもふ約束ならんと、とくしぬべき身を、おさなきものに心ひかれ、是までおもはずながらへしが、今又母うえのお顔見まいらせ、いとどかなしくはべるなりと、なげきかこてば、妙信も両眼をおしぬぐひいふ、かかる憂き目は其の身のみかは、わらはまで後の世を助からんとこそおもひつるに、又哀憐の心おこり、たえぬ思ひに、いとど罪も深からんと、悲しくはおもへども、前世の宿業ぜひもなく、此のうへは庵近き御寺に、尊き聖のましませば、かしこにまいり、御身の罪障をも懺悔し給へと、なみだながらにいふにぞ、お露聞きてとてもよにあるべきとおもはねども、今更母のなげかんことをさっしやり、又曇りなき身の言い訳せん時節もあらんと、彼是をおもひつづけ、せめてはこのさまかへんと、母に告げて翌日（あくるひ）其のお寺に参り、教化（けうげ）にあひ戒めをうけ、みどりの髪を剃りおとし、紅金をまじへ草花を色どれる小袖を脱ぎすて、白無垢にかえ、墨染めのころもの袖を顔にあてて、又さめざめと泣きにける。母も目をすりあかめながら、手をとりて仏前にうち向かはせ、かく罪ふかき身にはべれども、南無妙法の功力

（くりき）にて安養

浄土に導き給へと、くりかへし伏し拝みつつやがて笹川に立ちかへり、親子とも朝には鉄鉢の米をかしき、夕べには刀根川の水をくみ、芝を折り松のはをたきて、ほそき煙となしくらしけるが、其のとしの暮れの秋に、萱村が方に召使たる弥作といえる下部をさきにたてて、男共三、四人、駕さし荷ひて此の庵に来たり、妙信に向かってもうしけるは、われわれは椎柴野より罷り越したる者どもなり、お露どののここに有りて、剃髪し給ふ御心根のいたはしさに、さてはなき名負ひたるにてありつるかと、悦次郎さまにもはじめて後悔したまふなり、其の上、彼の方に引き取り給ひと、おさなき人のあけくれに母御をしたひ浮岩（あこがれ）給ひ、此のほどは御ここちすぐれず、驚風のむしとやらんにて、けふあすもまたぬ御ありさま、せめて息あるうち、母御の御顔見せまいらせんと、御迎へのため参りたり、くれぐれ彼の方には、おろかに思ひ給はぬよしなれば、御心おかれず、とく御こしありべしと申し入れけるに、此のときお露は、癪おこりたりとて、房間に引き籠もりいたりけるが、是をきくよりも病苦をわすれ、立ち出てみるにとし頃しりたる弥作のむかしをかたるもなつかしく、されど

今此のさまとなりて、その人にまみへんこともはづかしけれど、稚きものの、今を限りときく悲しさには、あとさきも弁へがたく、母に暇乞ふさへもそこそこにして、はやくも駕に打ち乗りければ、弥作下知してかき上げさせ、そのまま足をはしりにはせ行くほどに、とね川の岸にいたりここより舟にめされ、おこしあれとて駕よりおろし、あやしげなる苫舟にあゆみわたして乗せたりける。然るにおもひよらず飯岡にてなき名覆せし嘉平次苫おし上げ、つと出て、お露が手をとり引き入るるに仰天し、こはいかにといふ間もなく、岸より舟をおしいだし、弥作をはじめ男共、駕ふりかたげてうせたりければ、嘉平次お露が体を見て、もし身を投げんもはかられずと、ありあふ縄に縛りからめて、川下に葭高く生ひ茂りたる中に舟を漕ぎ入れ漕ぎ入れ棹立てて繋ぎ置き、今は心安しと、摺火打ちとりいだし、たばこの煙、輪を吹くありさま、さながら強賊（きょうぞく）なんどのごとく垢付けたる古布子をちゃくし髷髪（きょうはつ）おどろに似て眼ひかり、ふためとも見もやられぬ怖ろしき顔色にて、いつぞや飯岡において、汝に恋慕し度々口説け

ども随わざる奇怪さにしのび入りていまだ素意も遂げざるうち、後室に見咎められ、むなしく汚名を蒙り追い出されしはまさしく無名の難に似たれど、我が為には赤縄の神にして、もはやおことと浮き名たちたるうへは、いなむとも詮なし、速やかにわが心にしたがふべしと囁やくごとくいへども、お露の耳には雷声のひびくかと思はれ、両眼に涙せきあへず、とても身はなきものと見向きもやらず、一心に題目をとなへ、目をとぢていらへせざれば嘉平次いよいよ憤怒をあらはし、かくまでもおもへばこそ汝が笹川の庵にあることを聞きいだし、椎柴野の弥作をかたらひ金銭を施し、悦次郎方よりの向かひといつわりて、ここにおびき出せしなり、去るにても飯岡にありつるよりは、容貌はかはりたれども、全体のあてやかなるは日頃に倍し、わが執着の念ますますおさゆる所なし、とうつつをぬかし寄り添へども、こなたは一心不乱に覚悟の体。よし命はおとすとも、御身の道ならぬ心には元とぞしたがはじといひはなしてぞ観念す。嘉平次いかりつ、なだめつ、さまざまに心を尽くせど、なかなかおつべくも見ざりければこたへ

かねて、にくさもにくしと一っ刀を抜き放し怨みの程を思ひ知れやと、こころもとをさし通せば、あっとばかり身悶えし苦しむ所を足下にふみしき、さんざんに切り屠り、死骸は刀根の水底に、うろくずの餌となるべしと、蹴りやり捨てたる折りふし、俄に空かきくもり、月きえて闇夜となり、大雨車軸を流しければ、嘉平次しきりに寒戦し、苦ひきかぶりて逃れんとするに、棹もつ手も震い、水中に取りおとし、引き上げんとして見れば、お露が死骸（なきがら）を捨てたる葭芦のうちより、ふしぎや光明赫々と四散しけるにぞ、こはいぶかしと見るうち、手足すくんで、身の毛もたつほどおそろしくおぼへければ、さすがの大胆不敵の嘉平次途方をうしない、たぢろく足を踏みしめ踏みしめ、漸くに艫をおしきりて、命からがらいづちへか逃げ去りける。

第六　兼題　再逢恋　野外露

さてしも笹川の妙信尼は、はからずもお露迎ひを得て、萱村方へいざなはれしは、ひとへに、高祖大士の御利益ならんと、やがて仏前に灯明をかかげ、香をもり、合掌して仰ぎ見れば、こはいかに、今までありつる日蓮大

士の木像、誰いづくへか持ち行きけん、御しとねのみ残りておはさざりければ、妙信解転（けでん）し、茫然たるに、折しもお露の顔色青ざめて、納戸より立ち出づるに、ふたたび愕き、あな、いぶかしや、御椎柴野より迎ひの駕籠にいざなはれ、出でゆきたりしが、何とてかへりしぞ、子細いかにといふに、お露聞きもあへず、さればこそ、わらは過刻より、何とやら胸くるしく、おくにふし、そのままどろみはべりしが、夢中に椎柴野より迎ひ来たり、わらはうれしく駕にうちのり行きたるに、おもひもよらず、飯岡にて、同じ無実の難にあひたる嘉平次といふ者、刀根川に待ち伏せして、わらはを無体に舟にのせ、椎柴野の迎へとは偽り、誠はわが手段なりと、道ならぬ恋をしかけ、したがはざるを憤り、終に此の身を水底に切り屠られしと夢見て目さめたるが、今に胸とどろき、渾身汗に浸りしなり、さはあれど母上の実にむかひのもの来るよし、おおせあるはいかにぞや、そらことばしのたまひつるかと、いふほど妙信額に皺をあつめ、始終をありのままに物語り、希有のおもひをなしいたるに、やがて近隣の農夫ども、日蓮大士の尊像を守り奉り、ここにはせ入りて申しけるは、今宵と

ねの水中より、　ひかりをはなつことしきりなるゆへ、急ぎ船に棹さして、是を探るに、されこそ此の庵に安置ありし尊像の水にただよひおはせしゆへ、引き上げ見ればことごとく血汐にそみておはせしこそふしぎなれと、口々にかたるを聞きて、妙信親子奇異の思ひをなしいふ、さては朝夕信念し奉りし余計にや、お露の夢に符号せしは、必定嘉平次が邪をしろしめされ、娘がかわりに立たせ給ひ、此の奇難をすくひ給はりしものなるべしと、ありし次第をつぶさにかたれば、人々手うちて感激し、今にはじめぬ利益のほどこそ有がたけれと、もとの所にすへまいらせ、香花をあらため、厚く恩謝し奉り、随喜の涙をながしける。然るに此のこと遠近に流布して、参詣群集し、日ごとに倍して施物をささげ宿願を訴へ、あゆみをはこぶものおびただしければ、椎柴野の萱村方にも、此のことを伝え聞きて悦次郎おもふよう、さてはお露に岐念なし、よし一旦は心がはりせしにもあれ、既に尼となりて、嘉平次が為に不慮の最期を遂げんとせしは、全くその意にしたがはざるうへの事なるべし。さいわいに

祖師の御身がはりをえて、其の身に恙なきは、日頃の信心懈怠なき余光ならん、左あれば、真実出家得道せし渠が心ねこそ不便なれと、想像するにたへず、或日編み笠ふかくかぶり面体をかくし、一僕をつれて此の笹川に来たり伺い見るに、いかにも衰廃せし弊室に、日蓮大士の御影（みえい）を安置したるが、参詣ことさらひきもきらず、妙信親子が勤行の体を見て、悦次郎おもはず涙をはらはらとながし、直ちに勝手によりおとづれたるに、お露是を見て、今更何といふべきようもしらず絶えて久しき対面に、ありし身のうき事ども、互いにかたり出でつつ涙にかきくれ、おもはず数刻をすごしたるに、かの凶党嘉平次は、飯岡を追い出だされしより、ここかしこに漂白のうち、お露の笹川にあることをきくより、偽りておびき出せしも、日蓮大士の御身がはりに、謀計むなしく消えたるを無念におもひ、またまた手段こそあらんとひとりうかれてここに来たり、参詣に紛れ、伺い見るに、いつの間にかは、悦次郎のお露と膝をならべて、ものがたりいる様子を見届け、さてこそかかる事のある故にこそ、我が心には任せざる

よと、いよいよ不良の心をおこし、いかにやせんとためらひいたるに、はや其の日も西に傾き、悦次郎名残を惜しみ帰宅の躰を見るより、嘉平次はやくもはしり去りて、小舟木の原に待ちうけてこそいたりける。悦次郎はお露が心服委細に聞きて疑念もはれ、今更不便と思いつづけつ立ち出でたるが、既に黄昏におよび、小舟木の原にいたり、ここに葭薄生いしげりたる中より、嘉平次あらはれ、ものをもいはず、悦次郎が肩先ふかく切り込んだり、すは狼藉ものよと呼びすてつつ、下部はあはて逃げはしれば、嘉平次たたみかけて切りつくるを、よろぼひながら、悦次郎引き抜きてあしらへども、進退叶はず数ヶ所手を負ひ、倒れ伏す所を嘉平次首筋を掴んで引きおこしいふよう、汝が為に玉浦の娘おみすに阻められ、其の上お露がつれなきも、みなわが為の恋の仇（あだ）、打ちはたして日頃の積鬱をはらさんと、過刻よりここに待ち受けたれば、とても遁れぬ観念せよと、さんざんに切り倒し、終にとどめをさしたりける。此の悦次郎が家に農祖より、相伝せし不動国行の刀あり、萱村の業をつぐもの、是を譲与せられ、常に腰をはなさ

ざること家格のよし、兼ねて嘉平次聞き及びたることなれば、此のとき悦次郎がもちたる白刃を引き取りすかし見るに、龍の形彫りたるは分明ならねど、切っ先まで樋の色赤く見ゆるに、さてこそとうばひととりて、行方しらずなりにける。憐れむべし悦次郎、不期（ふご）にして非業の最期をとげたること、お露ごとき信念の行者たらば、高祖大士の争か応験をたれ給へざるべき、悦次郎が父藤内は、法花批謗の徒なるがゆへに、その黙法なるか、まことに法花経の諸経にすぐれし事、諸仏出世の本懐只此の一経に。